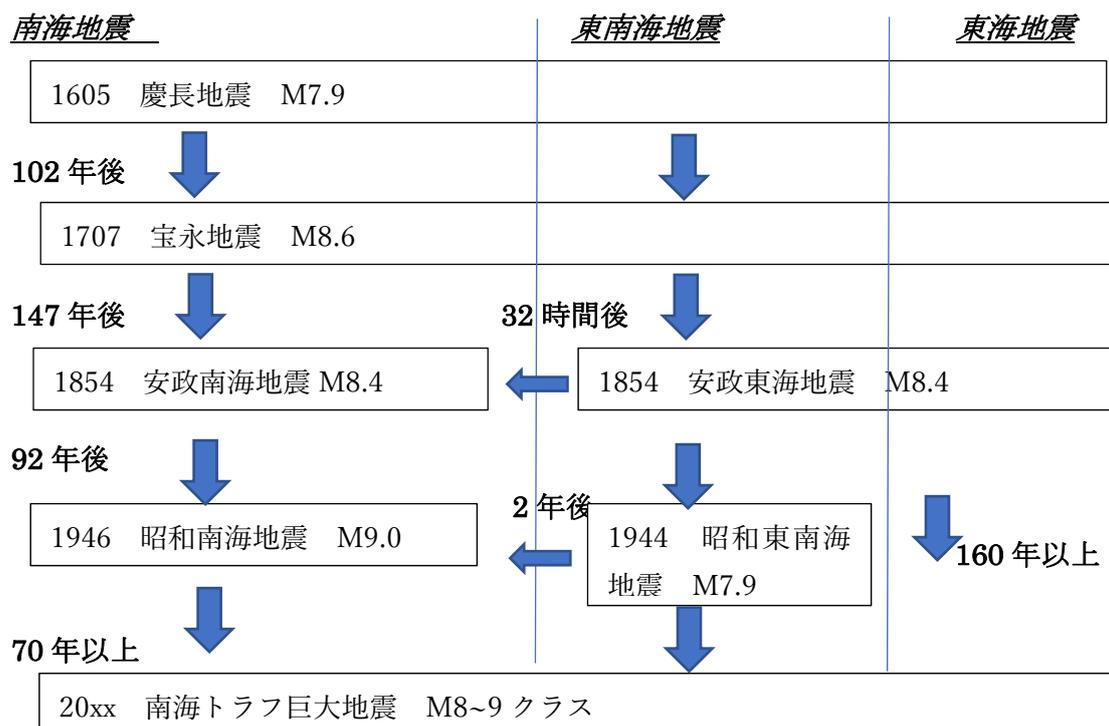


考える防災教室：日本で起こる自然災害 ほか  
 (大阪ガス、p.4-11、2017)

2017年9月8日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

まず、昔から日本で起こり大きな被害を出す代表的な自然災害を4つ挙げている。地震（津波）、火山噴火、台風（大雨）、土砂災害、大雪である。どの災害も死者を出す危険なものであるが、一つ目の地震（津波）は特に死者が多く注目したい。日本では、地震は体で感じるような震度が1年間に2000回起きており、これは地球上で起こる地震の約一割に当たる。家屋の倒壊だけでなく火災で多くの死者を出した阪神淡路大震災（1995年）や、新潟県中越地震（2004年）、津波で多くの死者を出した東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016年）がよく知られている。

これらの死者が多数出た地震を踏まえ将来注意しなければならないのは南海トラフ巨大地震である。この地震は駿河湾から九州東方沖に延びる海底のくぼみ（トラフ）で起きるおそれのある複数の震源域が連動し起こる。最大クラスの地震が起きると21都道府県で震度6以上の強い揺れ、8都道府県で20メートル以上の津波が襲うと想定されている。なぜ現在このように注意喚起が行われているかという、南海トラフで起こる地震が昔から一定の周期で複数回起きていることに起因する。すでに、昭和南海地震から70年以上安政東海地震から160年以上経っているため、次に起こる南海トラフ地震はM8~9クラスのものが30年以内に70%以上の確率で発生すると予測されている。



大きな災害が起こると、生命が脅かされるのはもちろん生活までもが侵される。かつて起こった阪神淡路大震災では、M7.2の地震が発生し約6400人が亡くなりライフラインが破壊された。電気は約260万戸が6日間、電話は約30万回線が14日間、ガスは約86万戸が84日間、水道は約127万戸が90日間止まっていた。南海トラフ巨大地震ではより大きな被害が出るのが予測されており、電気は約2710万戸、電話は約930回線、ガスは約180万戸、水は約3440万人が停止すると考えられており、阪神大震災よりも広範囲かつ何倍も被害がおよぶと予測がたてられている。特に、生命を維持するうえで重要な水は復旧に時間を要するため、季節によっては脱水症状で死亡者が二次的に増える可能性もあり高齢者は特にリスクが高い。また、電話や電気がつながらないことにより自宅療養中の患者の容体悪化が起こっても病院と連絡がつかないことや、各病院間の連絡がうまくいかないことで急患受け入れなどの不具合、そもそも治療のための器具が電力不足で使用できないことも可能性がある。他にも道路の陥没や崩落などで救急車両が通行できず救命処置が遅れることや、特に僻地などでは目的地にたどり着けないこともあり得る。このような場合はドクターヘリが活躍することになると思われるが、大規模な災害となるとキャパオーバーとなってしまうことが考えられる。ハードが足りない事体は大いに考えられ、不足を完全に埋めることは金銭的な観点からも不可能である。そのため、普段からライフラインが停止したときに備え、身の回りのもので復旧まで切り抜ける方法を考えておくべきであろう。